高校教育旅行　注目の訪問先 台湾

「学び」と「交流」台湾修旅に実感

約65万点の文物を所蔵する故宮博物院（台北市）

台湾への高校の修学旅行は増加傾向にある。全国修学旅行研究協会の調査によると、2010年度は61校、9565人。前年度から9校増加した。内訳は公立が17県の32校で5739人、私立が20県の29校で3826人だった。

実施高校を出発地別にみると、中部が18校で最多で、続いて近畿が17校、関東が11校、東北が5校、関東が17校、中国四国が7校、九州が3校。旅行費用と旅行日数の平均は、公立が9万5010円で4・1日、私立が12万7814円で4・4日だった。

修学旅行先としての台湾には、地理的な近さに加え、安定した政治経済や日台関係、良好な治安、緊急時や急病時に対する態勢などの利点がある。定期便の台北までの飛行時間は東京から約3時間30分。航空各社が日本国内の主要空港に就航している。時差もマイナス1時間。距離、時間、予算に制約がある修学旅行の目的地として適している。

修学旅行先に台湾が選ばれる理由は、旅行実施の利便性や安全性だけではない。教育効果の高いテーマが数多くある。

【歴史を学ぶ】台湾の歴史には学びのテーマがあふれている。国際情勢に揺れ動く近現代史や日本との深いかかわりを歴史遺産などから体感することができる。台湾の歴史を学ぶことが、日本の歴史を学ぶことにもつながる。

キーワードの1つは「日本統治時代」。19世紀に入ると列強各国が接近し、台湾をとりまく情勢が一変。1894年には日清戦争が勃発し、清朝を破った日本による台湾統治が1896年に始まった。約50年間に及ぶ日本統治にはさまざまな評価があるが、近現代史を学ぶテーマとして興味深い。

統治時代を学ぶことができる歴史的な遺産も数多く現存している。統治時代に「台湾総督府」だった建物は現在の行政の中枢、台湾総統府（台北市）、「総督官邸」だった建物は迎賓館として使用されてきた台北賓館（同）、日本人技師が建設を指揮し現在も稼働している烏山頭ダム（台南市）などがある。

【活力を体感】台湾の産業や都市からは、経済成長を遂げた活力を感じることができる。

「台湾のシリコンバレー」と言われる新竹科学工業園区が台北の近郊に1980年に建設されたのを契機に、ハイテク産業が急成長した。コンピューター、半導体、通信機器、精密機器などの分野が伸び、世界有数のIT産業国になっている。パソコンのエイサー（宏碁）やASUS（華碩電脳）などは日本でも有名だ。

都市や交通網の整備も進む。台北市では商業施設や高級ホテル、国際会議場などが相次いでオープン。新興地区の信義エリアには、台北市のランドマークとなっている超高層ビル「台北101」がある。高さは508㍍、89階の展望台は観光地として有名だ。

台湾は九州ほどの面積の本島と、金門、馬祖、澎湖など点在する離島を含めて79の島で構成されている。チョウや花をはじめ動植物の宝庫。温泉も各地にわき出ており、観光や余暇に利用されている。

台湾最大の淡水湖の日月潭（南投県）、東アジア最高峰3952㍍の玉山（嘉義県）、美しい渓谷が広がる太魯閣峡谷（花蓮県）などは有名観光地だ。

【交流を深める】台湾はアジアの中でも親日・知日派が多いとされている。それは本当なのか、なぜなのか。日本の若者たちが台湾を訪れ、交流を通して考えることで国際的な視野を広げることができる。

日本統治時代に日本式の教育を受けた高齢者には、日本語を流暢に話す人も少なくない。これらの世代の人々が激動の時代を生きながらも事実や体験を語り継いでくれたことで、現在の日台関係が築かれている。

現代の台湾の若者にも、日本に親近感をおぼえる人は多い。アニメや漫画、映画など日本のサブカルチャーに夢中になる「日本フリーク」の若者を指す言葉として、「哈日族（ハーリーズー）」という言葉があるほどだ。

また、東日本大震災に際しては、台湾から厚い支援が寄せられた。物資の提供や人的な交流に加えて、日本に贈られた義援金は200億円を超えると言われている。人口2300万人、平均年収160万円という台湾の水準を考えると、日本を思う気持ちの大きさに驚かされる。

歴史、文化、人に触れる
日本とのかかわり深いテーマも

総統府（写真上）と台北賓館は指定の日時であれば、一般の参観が可能だ。詳細は総統府公式ホームページ（http://www.president.gov.tw/default.aspx?tabid=173、中国語）まで

茶芸（写真）の体験をはじめ、伝統的な菓子づくりや太極拳などの体験を盛り込む修学旅行も増えている

台湾は海外修学旅行の訪問先として注目されている。移動距離の短さや時差の小さなどの旅行条件、治安の良さなどの安全性はもとより、親日・知日派の人が多く、東日本大震災に対して多額の義援金を送ってくれたことでも、交流の気運が高まっている。日本とのかかわりの深い歴史や文化、成長著しい経済や産業、美しい自然など、台湾の魅力は尽きない。日本からの修学旅行に対する学校間交流の受け入れ態勢も充実しており、「学び」と「交流」を重視した修学旅行が期待できる。

台湾基本情報

人口：約2300万人
面積：約３万6000平方キロメートル（日本の九州ぐらい）
気候：北部は亜熱帯気候、南部は熱帯気候。台北の気温＝１月最高18.9度・最低13.3度、４月最高25.6度・最低18.7度、８月最高33.5度・最低25.6度、10月最高27.8度・最低22.0度
民族：漢民族と先住民族（14民族）
時差：マイナス１時間
言語：公用語は中国語（北京語）。台湾語や客家語を話す地域があるほか、先住民族にはそれぞれの言語がある
通貨：ニュー台湾ドル（ＮＴ＄、元、圓で表記）
台湾の教育制度：
初等教育＝国民小学（小学校に相当）に６歳で就学し、修業年数は６年。
前期中等教育＝国民中学（中学校に相当）。修業年数３年。
後期中等教育＝高級中学（普通科高校に相当）、「高級職業学校」（実業系高校に相当）など。就業年数は３年。
高等教育＝大学。一般学科は４年制。
※義務教育は、国民小学と国民中学を合わせた９年間。
※学期は、高等教育までのすべての学校が２学期制。基本的に１学期が９月１日から旧正月が始まる１月31日まで、２学期が２月１日から７月31日まで。８月中が夏休みとなる。

学校間交流を歓迎
希望校は350校以上

台湾には交流に前向きな学校が多い

修学旅行のメーンテーマに国際交流を掲げる学校は多い。台湾には、学校間交流の調整、受け入れに関する態勢が整備されている。受け入れ組織として「教育旅行策略連盟」を組織。交流に関心を持つ台湾側の受け入れ校として350校以上をリストアップしている。

学生同士の交流で課題となるのは言語の壁だが、簡単な英語と漢字を使った筆談で解消できることが多い。また、台湾の高校には、日本語学科や第2外国語学習として日本語コースを設定している学校も多い。台湾の学生たちはアニメやテレビドラマ、音楽などを通じて日本への関心が高く、共通の話題もすぐに見つけられそうだ。

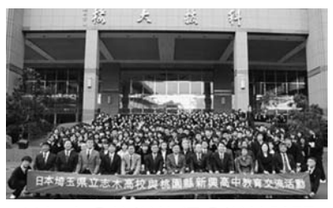
日本側の学校や旅行会社による交流の受け入れ校探しには、台北駐日経済文化代表処（台湾の外交窓口）や台湾観光局が協力している。

日台の青年交流へ ワーホリ査証発給

日本と台湾の間には、09年6月から相互に「ワーキング・ホリデー制度」が導入されている。台湾のワーキング・ホリデー査証は、18～30歳の日本旅券を所持している人が対象。最長1年間の滞在ができ、その間、滞在・旅行費用などを補うために必要な範囲での就労が認められている。

ワーキング・ホリデーの査証申請場所は、台北駐日経済文化代表処（東京）、札幌分処、横浜弁事処、大阪弁事処、福岡弁事処および那覇弁事処。

高校訪問で交流に成果


11年度の修学旅行の学校訪問

受賞理由は、台湾での修学旅行の実施が他の高校に先進的な事例となったこと、日台間の青少年交流を促進したことなど。特に、埼玉県は県立高校の海外修学旅行の解禁が全国で最も遅かっただけに志木高校の修学旅行は注目されていた。

志木高校が台湾を旅行先に選らんだ理由には、埼玉県の実施基準が定める旅行日数や費用の上限に合致したことに加え、治安の良さや温暖な気候、学校間交流の充実した受け入れ態勢などが挙がる。

台湾での修学旅行の実施に初年度からかかわる木田教頭は「生徒たちが国際的なコミュニケーションを実感できるよう、学校間交流をメーンに据えた本校の修学旅行が評価されてうれしい」と話した。志木高校には、台湾での修学旅行を検討している県内外の高校から問い合わせが多いという。問い合わせの内容は学校間交流の内容などが中心だ。

志木高校の学校間交流の訪問先は、初年度と2年目が新竹市にある輔仁大学で、同じ高校生ではなく、日本語学科の大学生と交流した。3年目の11年度は、桃園県の新興高級中学（高級中学は日本の高校に相当）だった。

11年度の修学旅行は昨年11月29日から3泊4日の日程で2年生310人が参加。学校訪問では全体行事として学校の特色などを紹介し合ったほか、志木高校の生徒が「鳴子踊り」を披露した。クラス単位では日本語学科の生徒と交流し、プレゼントを交換したり、中国語の歌を歌ったりした。学校間交流のほかにも、班別研修として台北市内を散策する際、日本語を学ぶ台湾の大学生をガイド役に現地の生活や文化に触れた。

修学旅行の学習テーマとして注目
日本人技師の功績学ぶ
八田記念公園 烏山頭ダム

八田與一記念公園に復元された官舎

烏山頭ダムのほとりに設置されている八田與一氏の銅像

日本からの修学旅行で訪問が増えそうなスポットが、台南市官田区にある烏山頭ダムだ。日本統治時代に完成したダムで、設計、建設を指揮したのは石川県出身の土木技師、八田與一氏（1886～1942年）。ダムの完成により灌がい設備が稼働し、農業生産性が向上。地域を豊かにしたとして、八田氏は地元住民に慕われた。昨年5月には、台湾当局がダムのほとりに八田與一記念公園を完成させた。

八田氏は現在の金沢市に生まれ、東京帝大で土木を学んだ後、台湾に赴任し、水利事業を担当した。約10年の歳月をかけた大規模工事の末、1930年に東洋一の規模を誇る烏山頭ダムを完成させた。

ダムの堰堤長は1273㍍、貯水量は1億5千万㌧。給排水路は1万6千㌔、灌がい面積は香川県と同規模の15万㌶に達する。ダムにはコンクリートをほとんど使わずに、粘土、砂、小石で建設するセミハイドロリックフィル工法を採用。土砂が堆積しにくく、現在も稼働している。

八田氏は台湾を去った後、フィリピンに向かう途中に乗船した船が攻撃を受けて死亡するが、その功績は台湾の人々に語り継がれ、放水口の近くには墓や銅像がある。毎年の命日には地元住民により慰霊祭が開かれ、その功績は台湾の教科書でも紹介されている。

八田與一記念公園には、八田氏や家族が暮らした宿舎など、日本家屋4棟が復元されているほか、各種資料の展示やドキュメンタリーフィルムを放映する記念館がある。昨年、八田氏の命日にあたる5月8日に完成式典が開かれ、台湾の馬英九総統、頼瑟珍観光局長が出席したほか、日本から八田氏の子孫や国会議員、関係者らが参加した。

今年5月の慰霊祭は、没後70年にあたり、盛大に催される予定だ。

マニュアル（左）とDVD（上）

旅行マニュアルやDVDで情報提供
台湾観光協会

台湾観光協会は、台湾での修学旅行を検討している学校、または、修学旅行を担当する旅行会社に対する情報提供に力を入れている。各種の相談も受け付けている。

資料としては「台湾教育旅行マニュアル」を配布しているほか、映像を収録したDVDの貸し出しを行っている。

問い合わせは、台湾観光協会東京事務所、大阪事務所まで。

Time for Taiwan
旅行臺灣 就是現在
台湾観光局　http://jp.taiwan.net.tw
台湾観光協会　http://www.go-taiwan.net
東京事務所　〒105－0003　東京都港区西新橋１－５－８川手ビル３階　TEL.03－3501－3591　FAX.03－3501－3586
大阪事務所　〒530－0047　大阪府大阪市北区西天満４－14－３住友生命御堂筋ビル６階　TEL.06－6316－7491　FAX.06－6316－7398
Taiwan THE HEART OF ASIA
台日観光促進年
もっと！海外へ
Japan. Endless Discovery. 日本，精彩無限
AD by Taiwan Tourism Bureau